天使のクライ

桐藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使のクライ

【Ｎコード】
Ｎ９９０５Ｃ

【作者名】
桐藤

【あらすじ】
いつの日か・・どこの時代か・・・いやこの時代で、なんと言うか、ごく普通の少年が、ごく普通に帰ってきたら・・・天使がいた。

第1章―押し込み天使―

第一章～カツアゲの天使

ガッシャーン

「わーい！！！VV」

・・・ちなみに、→の言葉、俺の言葉じゃぁ無いです。絶対に。
こんな訳のわからんVなんて語尾につけません。じゃぁ、誰だって？
しらねぇから怒ってるんです。・・・そもそも、ここは俺の家です
から・・・
一つききたい・・・ガッシャーンってなんだよ！！

「あ、これ美味しそう！！」

ヒョイ、パク・・

「リンコ～VV」

・・・何故パク・・・の後にリンコ～が出て来るんだお前？
言うなら、普通にパクリンコって言っちまえよ！！
あ、そういう問題でもないか・・

「あ～つまんない～・・・・あ、宅配便だ～！」

は？お前・・・何も来てねぇじゃねぇか！

つられて後ろを見てしまった俺はなんなんだよ！！
（あ、今玄関の靴箱の所にいます）

あ～！！何なんだよ！！ったく・・・もう家入るか
ツーかお前何も・・・

ピーンポーン

〔宅急便デース〕

・・・・は？

「お、来た来た・・・って宅急便かよ！私は宅配便って言ったのにぃ！」

ツッコミどころが違うだろ・・・
まず、ここは俺の家だ！そこで真後ろから出て来た、宅急便の人から荷物を預かった。

バタン

と、同時になんか変なのが台所から顔を出したぁ！！

「アーー！！！！！！！！！」

「は？」

「私が取ろうと思った荷物奪いやがった！！」

　なら早く取れよ！！
「この野郎・・・痛い目に遭いたくなかったらさっさとその荷物よこせや。あぁ？」

　この時俺は思った。こいつ変。が、さすがに脅しはとてつもなく怖かったので
すんなりと、宅急便から来た荷物を渡した。

「わーい！！・・・って、そこですんなりされても困る！
はい、戻った戻った！」

　そこで俺は、

――――――――

↓Continue

　Or

Game over

――――――――

――――――――

が、

――――――――

　Continue

　Or

↓Game over

――――――――

「ポチット」

「えーーーーーーー！ちょっとぉ！困る！」

「困られても・・」

「困る」

・・・意味不明な会話で申し訳ないです。

「お前は誰だー！！」

「私は、天界で最も輝いていて、高貴で頭脳明晰で、スバ・・・ちょっと無視しないでよ！」

誰でも無視する・・・

「で？」

「カミサマ」

「ウソ付け」

限りなく変人だろ・・・

「（チッ）天使ですよー！」

・・・・・

「ウソだ！」

「イヤホンとに」

真顔で返されても・・・

「だって本当に天界ってつまんないんだよ？
いっつもいっつも階級制度に縛られやがってぇー！
しかもさぁ、部長マジイラつく！ちょっと自分より頭いいからって
人使い荒いしさー・・・」

怒るなよ・・・俺に向かって。しかも未だなんかいってるし

「だから、なんとなく
金持ちそうなオタクに居候でもさせてもらおうかと・・・
（$д$）（「３「）（プッ）」

その顔文字やめろよ・・・面白くねぇし・・・

「ま、よろしくお願いしますん」

「・・・・ご勝手に」

すげぇ疲れたからどうでもいいや・・ハッ

「で、俺の名前知ってるわけ？」

「そりゃぁねぇ、おまいさん何事にも下準備ってもんが必要なんよ。
わかる？霧霞丘１－４３－９って事もよぉ！！」

「・・・よく言えたな・・霧霞が丘なんて、って、

霧霞丘じゃねぇよ！キ・リ・ガ・ス・ミ・ガ・オ・カだ！

「あ、そうなんだ（ッタク何だよ！このヘボファイル）」

何気にアッサリ納得

「で、お名前は、東桐　麗様ですよね？」

なんだかんだ言って、間違ってないか
確かめている。（ファイルを見て）

「。。さっきのタメはどこ消えた？」

「あ、じゃぁ戻そう！」

「戻せとは言ってない！」

・・・あきれる俺を置いて
台所に行く天使（？）

「なんか飯下さい」

「・・・・自分で作れ」

「え？電子レンジとかガスを壊しちゃうけどオッケー？」

「俺が作る」

「美味しい物にしてくれ」

「命令すんな」

「じゃ、美味なる物を頼むぞ。下賤の者」

「・・・じゃ、とびっきりマズイので・・・」

「うわーん！ごめんなさいぃ！美味しいのにして！！」

「・・・・・」

ぎゅーーーーーー

「放せ・・・」

「美味しいの作ってくれる？」

少々涙目でいるの・・か？

一方俺は苦しかった。。。吐き気してきた。。。適当につくろって

「あぁ・・・」

「やッほほーーーーーーい！！」

はぁ・・・・

第1章―押し込み天使―（後書き）

普通に麗はまだ、自分と置かれた状況と、これから始まる凄いことが、予知できる・・・・とか言う凄いことはできない。

第2章―ご飯と天使―

「・・・・で？」

第一声が「・・・・で？」かよ！

なんかもうちょっとましな発言は無いのかねぇ？

天使

「おーい？きいちょる？」

何弁？

「きいとんのか？おみゃーさん」

えーーーーー

「ご飯は未だかってきいとんのや！」

だから何弁・・・？

「まだ？インスタントでもいいよーこの際」

「あ、ならインスタントな」

「え・・・乗りで言っただけだよ？本気にしないで！！」

「じゃぁ言うな」

「まだ？V」

「できた」

テーブルの上にのるのは、一つのお皿。
要するに、俺は、一人分しか、作ってないと、いう事。

「え。。。。。」

「いただきます」

「え、、、、、」

パク

「旨い」

「え・・・・・・・・・・ンジャ私も」

ヒョイパクパクリンコ

「おい！何、人の食って・・・ってもう無いし！」

「腹の中に未だあるよ？」

「・・・自分で作れ！」

「お腹減ったー」

こんちくしょう。俺はもう一つ作れってのか？
しぶしぶ、また台所に行った・・・嫌だけど。

腹がなる・・・

台所に行き、見回した・・・

何かいいものは・・・・が、辺りを見回して気付いた。

「何でお前が俺の後ろにくっついてるんだよ！」

「え、いや、何を作るのかと・・・」

「・・・・」

「見ちゃダメ？」

「・・・・ハッ」

俺は鼻で笑った。こいつウザイ

「あーーーー！！鼻であしらったー！」

「・・・・笑った・・だろ？」

「Ｙｅｓ！！！ピンポーン大正解ー！花丸ー」

と、そこで天使が頭をなでようとしたのですかさず言った。

「飯作るからどっかいけ」

とたんに引っ込めて、俺の本来ならば座る場所にどっかり腰掛けた。

「まだー？」

・・・・その時俺は思いついた。

「・・・・・・」

第2章―ご飯と天使―（後書き）

次回に続きますよー・・・麗の～クッキングー！

第3章―麗の作戦と天使―

・・・・面倒くさいが

―――――――――

→ご飯を二人分作る

外で食う

隠れて食う

―――――――――

・・・後者の二つは見破られる

可能性大・・・二人分作るか・・・

パラパーパッパッ♪

パラパーパッパ♪

パラパーパーパーパー

パパパパパ♪

繰り返し

「って。。。何今日の料理見てんだよ！天使みたいな物体」

「え・・・ひどい！れっきとした天使だよ！」

「・・・」

「グスン」

ただの、変人（見た目も）だと思うが・・・。

お、今日の料理で美味しいおにぎりの作り方ってやってるぞ。
これにしよう

三分経過〜

「おらよ」

「やったー！！！」

自分の所はイタリアン
天使みたいなブツは、にぎりめし

「・・・・」

「イタダキマス」

カタコト口調だぞ？天使よ

「いただきます」

・・数秒後

「グスグス・・・オイイシカッタデス。ゴチソウサマデシタ。
オネガイデス。オナカガヘリマシタ。レイサマ」

「・・・却下」

「グスーーーーーーン」

・・・

「あぁ、うめぇ・・・」

「ピシャーーーーーーン」

お、意味不明な効果音を出し始めた！！

「貴様ぁ！私に飯を出さないとは何事か！さっさとにぎりめし以外のましな食いもん出せやこら！」

お、脅し？

「・・・」

スタスタ・・・

「え・・・れい君？」

四分チョイ経過

「れ・・・麗君？」

「おらよ」

脅し野郎の前にカップめんを置いた。

特大の

「ワーーーーーーーーーーイ！」

ぱくーーーーーーーー

「うまうま」

・・・・・せっかくとって置いたのが・・・

「アチィ！でも、うめぇ！！！」

・・・・むかつく！

「へいふん。これふまいへ」

うるせぇな！何口の中にくいもん入れて喋ってんじゃー！こんちくしょう

「あひぃ！」

・・・・・

「レイフンアフイ。・・・あ！ヘヘヒフケテ」

何語？

「ぷへっ！」

きもっ！

「麗君。テレビ付けてって言ったんだよ！」

・・・・ペキ

何かが鳴った・・・その後、俺は、テレビの、スイッチを、持って・・・

スパコーーーーーン

「ヘムギャーーーーーーー」

「お、いい音だな！」

「ヘムシャーーーーーーー」

ハッ！雑魚が！

「きゃーーー」

天使よ。凄くストレス発散になったぞ。アリガトナ

第４章―遅れ遅れの自己紹介―（前書き）

ここでのナレーター（？）は、桐藤こと作者がやらせて頂きます。
ヨロシクデス。

第４章―遅れ遅れの自己紹介―

「わーーーーーーーーーーーーい！」

バコッ！

「浮かれんな」

「は、はい」

・・・・・・

あの・・・自己紹介・・・して？

「・・・・・はぁ？」

へむにゃぁ！

「じゃ！私から私から！！！！」

お願いだから空気読んでくれ・・・天使

第一部・・・天使どん

―――――――――――――――――――――

あのねぇあのねぇ！！

あーーーーーーーウレスィーーー

え？何から話せばいいのさ？
・・・自分についてなら何でも良し？
ヤッホホーーーーーーイ
・特徴・・あのね、
頭脳明晰で、天界一を誇る魔法の使い手！！
その名も氷の使い手・・・
あ、作者がなんか近づいてきた

―――――――――――――――――――――

「あ、切りやがった！せっかくの・・・せっかくのがぁ嗚呼あああ！！！！！！」

キモイぞ天使クン

「。。。麗クンの口調で言わないデー！！」

まぁ・・・確かに怖い

「あ、わかる？だよね！」

「・・・おい。そこの変人ども」

・・・・・・沈黙の行

・・・天使はふざけ過ぎなので私がやる・・・という事で・・・！

天使は

特徴・・・の前に

名前・・・ティエル

特徴・・・じゃなくて

性別・・・女・・・の子

今度こそ

特徴・・・青い髪の～♪短い髪の～♪目付きは普通の女の子～（金色Ｖ）♪（ｂｙ　亜麻色〇髪の乙女・・・だっけ？）あ、羽付いてますよ。きちんと、してないのが。ぼろぼろ、所々穴が開いていて、そこから紐が通してあるという・・・なんとも痛々しい姿

格好（？）・・・マントです。マントです。もひとつおまけにマントです。まだまだマントが続きます。（麗君は脱がしたことありません）あ、凄くマントが続いた後に、ノースリのロングスカートを着ています。で、顔が、また・・・顔半分にだけ仮面付けとるんですよ。白い・・・

と、まぁ・・・こんな感じですかね？

・・・
うーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーん？

「え・・・ねぇ・・・ちょっと・・・そのうーーーーーんって何？
違う所ある？・・・あ！お前なぁ・・・」

げ、天使がなんかこっち来た・・・・

「プリティーな・・・・が抜けてる！」

ボキッ

「・・・・・」

沈ーーーーーーーーーーーーーン

「お前は『プリティー』じゃなくて『馬鹿』もしくは『そのまま』」

「・・・ひどいよーーーーーーーー」

酷くないと思ふ

「え・・・最後のふは何？」

え？別に？

「・・・・・」

さぁ、サクサク次へ　ＧＯ―

はい、麗ちゃんですＶ。

名前　東桐　麗（ちゃん）

性別　男子生徒

特徴　・・・髪の毛　黒　眼　黒　。普通・・・よりはちょっちいいマンション。両親は他界

・・・してません。母　バリバリＷｏｍａｎ　父　バリバリＭａｎ・・・ってとこですかね・・・。あ、そうそう。父とは母別居中。（・・・なんでそこまで詳しくしたかと言うと、だってお父さんとか出したくなかったんです。ただそれだけの理由です。）たまに、母が顔を出すくらい。母　雨簾（ウレン）　佳奈（カナ）　父　東桐（トウキリ）　雄示（ユウジ）　です。

アハ

「ねぇ・・・何？その差・・・」

え・・・気にするなよ・・・

さて、今出てきている者の自己紹介・・・は一応終了です。ヘッポコですがヨロシクデス。

楽しかったねぇ。自己紹介

「最初だけね・・」

しょんぼりすんなヨ・・・さて、これからスクランブルエッグ作って♪そんでその上に♪ソースと醤油と黒砂糖をメヒョメヒョに混ぜた物でも食べよう・・・フフフ

「・・・・え・・・・どんだけ？」

ガン！

「天使につっこまれるなんて、相当やばいぞ作者」

・・・むなしい

第5章―ゲーム天使―（前書き）

これだけは初めに言わせてもらいます。この話、に出てくるゲーム・・分かる人には分かっちゃいます。
（多分大半の人、分かります）

第5章―ゲーム天使―

ピコピコリーーーン♪

「あ！！大黄色ルリーだ！！ラッキー！」

・・・はい、見て（聞いて？）の通り分かります。ゲームをしているんです。

それは、結構前のこと。

プーンポーン

「は？」

驚きと共に（普通のはず）天使の方を睨んだ。どう考えても天使のせいに決まっているからだ。が、一方それは明後日の方向を見てこっちにはわざと０・・・０気付かないふりをしている（バレバレだ）。

ペンポーン

「ナーナー麗ちゃーン」

声で判断しました。先輩です。同じ高校の。
なんだか背後の気配がなくなっていると思って後ろを見たら
天使がいない・・・。変わりに玄関からでよ・・うと・・した・・
所を！！！

バキ

「うひーん。どうせ普通の人間には見えないモン！！」

そういう問題じゃない。

「・・・グス」

「・・・・」

ガチャ

「なんすかいきなり・・」

「いきなりではないぞ。ちゃんとインターホン押した」

「・・・まぁ、そうですけど」

「それにしてもお前の家のインターホン・・・ぷぷぷぷ」

笑われた・・・そりゃー普通笑われる・・・

「あははー。麗クン笑われてループププ」

「ん？誰だそいつ？彼女？従姉妹？隣の人？あ、ねぇちゃん？」

「兄弟いません！」

「あ、知ってるから」

「天使デース」

「ほう、よろしくな。天使ちゃん」

「ひゃー！すんなり受け入れたー！ねぇ、麗君も天使ちゃんって呼んで？」

「・・・去ね」

「ウヒーン」

「こら、レディに対しての礼儀がなっていないぞ！」

台所のドアの所から天使がすかさず言った

「そうだそうだ。モゴ」

・・・台所？・・・モゴ？

「こら！てめぇせっかく俺が集めた菓子食ってんじゃねぇ！」

「きゃー。もう胃袋の中！」

・・・・

「なんか暇そうだな・・・」

ひまじゃないっす

「なんとなく来ただけだ。あ、そうそうお前が貸してくれっていてたやつ、あれ、クリアしたから、天使ちゃんと一緒にやれば？」

「え・・・」

「あ、やる時は天使ちゃんからな」

「え・・・」

「じゃーな」

「わー優しい人だね」

「え・・・」

「麗君？大丈夫？さっきから「え・・・」しか言ってないよ？」

「え・・・」

スパコ＜ーン

・・・ムカ

スパパコーン

「うぅ」

「で、やるのか？」

「うん！！」

・・・・・と言うことで、なんかゲームをすることになったんですよ。

ゲームねぇ、天使出来んのか？と思ってたら、俺の杏仁堂ＤＢをどこからか持ってきていて、ちゃっかりと手に持ってカセットを入れ始めた。

「・・・・・」

「麗君。お先にやらさせてもらいます」

「ご自由に」

「やったー！」

と、言うことで先輩が置いていった『杏仁堂ＤＢゼリダの伝説無限の砂の時計』をやり始めました。・・・・

・・・おい、作者よう。これっていいのか？著作権とか・・・

第5章―ゲーム天使―（後書き）

スイマセン。多分大丈夫かと・・・次回に続きます。ゴメンなさい

第6章―ネーミングセンスゼロ天使―

ペコペコペーン←♪

「あ・・・ババァルリー・・・とちゃった・・・」

未だやっています。あのゲーム

「くそ、むかつく!!何こいつ、こっちの宝箱取れって言ったのあんたでしょ?敵増えたじゃん!!」

ゲームに八つ当たりすんなくそ天使

「くそーーーーーむかつく!!」

「いちいちむかついてないでさっさと先進め」

ボカ

「・・・え?」

「なに?麗君」

「人のゲーム機殴るんじゃねぇよくそ天使!!」

「え・・・いやー」

数分前

「おい、何だその名前？」

「え？リンゴ」

「どんなネーミングだよ・・・おい」

「えーだって、こいつの名前リ〇クだよ？リン〇！」

「・・・・おい作者！」

≪え？≫

「・・・・」

かなり後

「お、だいぶ・・・・近づいて・・・来て・・さっきより戻ってんじゃねぇか！！」

「なにさぁ！これでも進んだんだよ！さっきより。だって、さっき飲み物飲むときに電源消したらセーブするの忘れてて、全部消えちゃったの！」

「え・・・いちいち飲み物飲むぐらいで電源消すな！つーかセーブぐらいこまめにしろ！」

「いやだー！」

「馬鹿！」

「グスーン」

「いちいちめそめそすんなキモイ天使！」

「キモイ天使じゃないもん。ビューチフォー天使だもん」

「ナルシー天使！」

「ウエーン」

数分後

「お、敵・・・何だよこいつかよ、倒せない奴じゃん・・・チッ」

「舌打ちしてねぇでさくさく進め」

が、天使は軽やかにアッサリスルー

「あ。うぜぇ、人が聖地帯に入ろうとしたら、ところに来ないでよ！」

ボカッ

「あ、つい本気だしちゃ・・・・った」

ピーピーガーガガ

「俺のせいじゃないぞ？」

「うん」

タータタタタターン♪

「あ、オープニングの音楽・・・・」

「・・・・」

「あ、なんか普通だよ？・・・・って普通じゃなかったぁ！なんで？こんなに体力なかったよ？」

「・・・・」

ピコーン♪

「何が出てくるんだろう？」

←からは、ゲームです

「よくやったな。リンゴよ、見事海の王を救い出してくれた。礼を言うぞ、さて、ゼリダを助けてやろう」

「よかったね。リンゴ！」

「ｈｒ化ｓｊｄｍｓｂぉｐ３ｍｂｃ@０３ｈｋｊｂ、ん.ｊｋｗ」

パァァァァ

「わー！戻った」

「リンゴ。私を助けてくださってありがとう」

「リンゴ！」

だとさきっと未だ続くんだろうが・・・

「・・・リンゴ。。。良かったねぇぇぇ！！！うわーん！」

「・・・・」

リンゴって・・・リンゴで・・・イインスカ？

「うぅー！リンゴー！！」

こいつのネーミングセンス・・・どうにかならないものですかね・・・

第6章―ネーミングセンスゼロ天使―（後書き）

実際の話・・・です

第7章―クリスマスの天使―

クリスマス。クリスマス。クリストマス

「なんか意味不明なのが一字含まれてるよ？作者さん」

そこ、気にする所か？天使

「クリスマスプレゼント欲しい」

「ねだるなっ！」

「ねだらないと買わないでしょ？」

「（う・・・）お前、天使ならか弱い子供達にプレゼントを配ってやれ！」

「え・・・？なんで？」

「・・・・・天使だから」

「えーーーーー！！」

「うわっ」

意味不明な声出すなっ！！

「なんで？そんな制度なんて知らないよぉ！！えーー」

「。。。。。。」

と、いうよりかはそういう問題なのか？

「サンタさんでしょー！それは！！天使はお空の上から見守ってるモンなの！」

「・・・・つーかお空の上から見守ってんなら帰れよ！！」

「いいもん！どうせ私は悪い子だもん・・・だぁかぁらぁ、プレゼントくれ！」

「なんでそうなる！？悪い子はサンタからプレゼントもらえねーんだよ！」

「・・・・え・・・・・」

なんつーか、ガキのけんかのような気がしてならない。しかも何気に

俺は地雷を踏んだのか？！

「え・・・・」

俺は、呆けてる天使を背に悩んだ。このままじゃ、部屋を破壊されかねない・・・。

急いでクリスマスプレゼントについて考えなければ。

「・・・ひょ・・・・」

きも・・だが、口に出したら部屋を破壊される。。

「・・・・・」

うろうろうろ・・・・・

上は、俺です。考えられない・・・。しかもかれこれ、二、三時間経っていたりする。

「帰るぞ。脱走天使よ!」

「・・・・・ほへー」

「・・・・・はぁ・・・・・って・・・・誰ですかぁ??????」

ヤバイ、天使移り気味・・・。だれ?そこにいたのは、長髪白髪青い目の人だった。

ま、人じゃないとは思うけどな、羽生えてやがる・・・・。

「え・・・・誰ですか?」

「こらぁ！脱走したんだから、おとなしく戻れや！」

「サラッとスルー・・・」

「プレゼントくれ～」

「無い」

ギロ

「お・・・俺？」

「そうだよ！コンチクショウ。あぁ？なんか文句あんのカ？さっさと金出せばいいんだよ。金。マネー！”！」

「わざわざ英語で言うな」

「それぐらい自分で買いなさい。脱走天使」

「そもそもあんた誰？」

・・・・

「おっと。失礼。存在を忘れていて・・・いやはや私としたことが」

それ・・・軽くひどいですよ？

そして、そのおっさんは気分を害したのが分かったのか、いろいろと並べ立てた。

「いや。本当に失礼。ですが、存在を忘れられると言うことは、あ

る意味すごいですよ、
絶対に他の人に気付かれずに一生を過ごすみたいなものですから。」

「あんたさらっとひどいな」

「えぇっ！？」

相手は褒めたと思ったらしい

「・・・あ、で、ワタクシですが、上級天使キマイラ合成天使研究所脱走天使入れ刑務所の上級天使の、」

「長い・・・」

「ティエイタス・ラキアド・フライダス・R・メハロドス・クラオディエ・ウィリアス・ラトメテオ。
です。」

「・・・・じゃ、省略して、ティエイタスさんで・・・」

「せっかく長く言ったのに・・・」

「ねぇ・・・プレゼント・・・・・くれ」

「・・・・（ニヤ）上級天使キマイラ合成天使研究所脱走天使入れ刑務所に、戻るなら良いぞ。」

「え～！！上級天使キマイラ合成天使・・・（スイマセン。ここか

ら下は、めんどくさいので、脱走天使入れ刑務所って省略させて頂きマス。あ、実際は、ちゃんと言っています。）には言ってもどうせ何もくれないんでしょ？」

「え、まぁ」

「やだーーーーーーーーーーーーそれなら、麗君と一緒にいる～～～～～～～～～～～～！！」

「・・・・（はぁ・・・・・）」

「それなら、費用節約で少しの間、その方・・・名前はっと・・・」

と、またフォルダーを出して、探し始めたティエイタスさん。

「麗様の家に居候しても良い、と言うことで」

「やったーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

「うざっ」

「こんなの要りませんよ返します」

「困ります。返品されても・・・」

「不良品でしょ？」

「まぁ、頑張ってください。それでは」

そういい残して帰っていった、上級天使あった。

「大変だよ・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9905c/

天使のクライ

2011年1月16日14時22分発行